あるから

人・暮らし 発見誌
【飯能・名栗周辺】
arukara
July 2006 Vol.2

無料

特集 まちなか高麗横丁

暮・想（くらそう）
服部融亮さん

飯能探訪
みいつけた！
天覧山麓・東雲亭

連載：暮想（くらそう）

刻々と変化する山々の景色。この眺めこそが、飯能で暮らすものの楽しみ。

私は飯能に生まれ、もうあと数年で半世紀になります。そんな私が『緑と清流』『森林文化都市』『都会的な田舎まち』そんな自然に恵まれた飯能には、住んでいればこその取って置きの楽しみをご紹介いたしましょう。

私たちは毎日山を見ながら生活をしています。直ぐ傍には天覧山、多峯主山そして吾野や名栗に到るまでの山々、秩父連山などと幾重にも重なった山達を眺めながら生活をしています。私には絵心はありませんが、もしこの山の風景を色彩画にするのなら何種類の『緑』を使って表現したらいいのか・・・と、思うくらいです。この山達が見せる四季の移ろいは窓枠が額であるかのように、毎日新しい風景画を飾っているようです。そんな景色画のお勧めの一枚は『雨上がり』です。これからの季節、雨が多くなります。前日から降り続いた雨が、ようやく午後になってあがる。気温も上がり、雨で見えなかった山達が薄っすらと稜線を見せ始める。そして山肌には地上に降った雨が温められまた空へ戻るかのように霧となって立ち上る。その景色は緑の山々ではなく、墨の濃淡を上手く使い幾重にも重なる山や立ち上る霧が独特の世界観を表す『水墨画』のようです。この景色を眺めていると、雨が降り大地を潤し木々達が美味しい空気をつくり、蒸気が雲となり、また雨を降らす。そんな自然のサイクルを理屈ではなく感じてしまいます。しかもその優しい時間が夕暮れに近かったりすると、今度は白と黒の世界から一転、夕日に真っ赤に染まる山達に出会うことが出来ます。その美しさに思わず涙が・・・

これはホンの一例の紹介ですが、まったく同じことのない素晴らしい景色を居ながらにして私達は見ることが出来ます。生活のテンポがどんどん速くなっている今だから、ゆっくりと山の景色と飯能の生活を楽しんではいかがでしょうか。

飯能市山手町在住。般若山長寿院・観音寺住職。飯能幼稚園理事長。一方、趣味ではロックバンド「ヤンチャーズ」のボーカルを務めるという一面も。

●編集後記● いいこと、あるかも

創刊号を出してから時は流れ、早く次を出さねばと気にかかりながらも9カ月が経ってしまいました。当初はどんなもの好きがやっているのだろうと思われていたようでもありますが、徐々に反響や激励がこちらに伝わってきました。

第2号では「高麗横丁」を取り上げました。歴史がある町だけに切り口がむずかしかったのですが、「あるから」らしくありのままの「高麗横丁」を紹介したつもりです。

取材をして感じたのは、みんなが町に愛着を持っていること。取材を依頼すると、「横町を取り上げてくれるなら」と、誰もが快諾くださいました。本当にありがとうございました。また、郷土館職員の皆様のていねいな応対に感謝いたします。

とにかく号を重ねることが大切だと思っていますので、引き続き温かく見守ってやってください。

スポンサー募集

資金面で協力していただけるスポンサーを求めています。

●創刊号の訂正とお詫び
・間野黒指・細田の住民の特徴を紹介する場面で、一部誤解を招く文章表現があったことをお詫びします。取材対象者の発言として紹介しましたが、都合上当方で書き換えさせていただいています。
・「リパックみなみこま」は旧名、現在のグループ名は「飯能せっけん せせらぎ」です。

●当誌へのご意見・ご感想をお寄せください。

考房 あるから
357-0035
埼玉県飯能市柳町6・7・302
Ⓣ 042・971・3746 Ⓕ 042・974・0069
Ⓜ arukara@san-s.jp

制作 ●ディレクター 増田 伸一 *Shinichi Masuda* ●取材・執筆 石井 茂 *Shigeru Ishii* ●グラフィックデザイン 黒田 靖 *Yasushi Kuroda*

人々が日々宴に興じた「東雲亭」という料亭が天覧山麓にあった。

飯能探訪 みぃつけた！

飯能が遊覧地だった頃。

天覧山の麓に「東雲亭」という料理旅館があったそうである。その規模たるや、埼玉県でも一・二を争うほどで、百畳敷きの大広間に十いくつかの小座敷を備え、全盛期には武蔵野鉄道（後の西武鉄道）に揺られてたくさんの人が訪れていたというのだから、驚かずにはいられない。取り壊されたのは十数年前ということだから、四十代以上の人なら覚えておられることであろう。

ところで、なぜこの地にそれほどまでに立派な料理旅館があったのだろうか。「東雲亭」があったとされるところまで行ってみたのだが、現在そこは資材置き場となっていて、豪勢な料理旅館があった空間には到底思えない。

その理由を知るために、飯能市郷土館を訪ねてみた。が、「東雲亭」の説明が記された資料は、多くはなかった。探し出していただいたのは、「飯能郷土の誌」という「東雲亭」が自ら発行したという小冊子。飯能を知るためのガイドブックのようなものであろうか、そこには飯能の名所旧跡はもとより地形、歴史、教育、経済のことが書かれてあった。

そこから知ることができたのは、その頃、飯能をリゾート地化する「飯能遊覧地計画」が進められていたということ。計画の中で、天覧山、多峯主山は、第一区、第二区に指定されており、「東雲亭」は、まさに計画の中核部にあった宿屋だったようである。

ちなみに左記は、当書に記された「東雲台（亭）」の紹介である。

東雲台／天覧山麓霞の池畔東雲橋を渡りたる右側の台地を云う。老松散在清新の気満つ。東雲亭と云う料亭がある大小の室を有し諸般の設備が整へ環境閑静で又四周の展望も広く自然の景趣に富んでいる。

老松が散在するような趣きのある場所であったと書かれているわけであるが、現在と比べてどれほどに違っていたかは、これだけではわからない。ただ言えるのは、当時の都会人にとっても、武蔵野の名残がある飯能は最良の保養の地であったということだろう。自然散策を楽しめる山があり、舟遊びができる河原があるこの地は、遊覧地として人を集められていたのであり、「東雲亭」を中心に風雅な世界が繰り広げられていたことを思うと、感慨深いものがある。

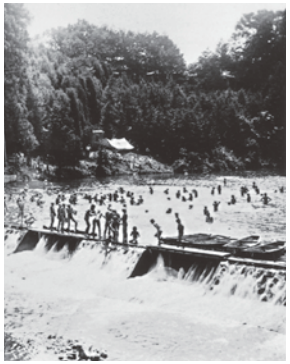
温泉場のような山の町。

「東雲亭」は、規模もさることながら、格式においても相当レベル以上であったようだ。飯能JCが発行した「飯能なんでも大全集」には、こんなエピソードが紹介されていた。左記は、それを要約させていただいたものである。

平山蘆江（ひらやま・ろこう）は、東雲亭が気に入り、滞在しては執筆するようになった。そのうち逗留中に病を患い、療養を続けながら東雲亭の離れに住みついてしまった。粋人といわれた蘆江が惹かれたのは、どこか「温泉場のような匂い」を持った山の町飯能であったと思われる。

そういえば、いまも河原町辺りの風情は温泉場のようでもある。

平山蘆江は、元「都新聞」の花柳・演芸担当の記者でもあった。花柳界を知り尽くしているともいえる文人が魅せられ、住みついてしまったわけだから、「東雲亭」という料理旅館は、さぞかし雅な雰囲気を漂わせていたに違いない。普段、そういう世界には縁がない私たちであるが、これもまた飯能の一面であり、飯能文化の懐の深さに少しだけ触れられた気がする。



「東雲亭」の面影を求めて。

天覧山・多峯主山と飯能河原。いまもシーズンになると多くの人を集めるこのエリアは、昔から飯能観光の中心であったようです。地元の人にいわせれば、子どもの頃から見ていて当たり前過ぎる風景であるのかもしれませんが、このように、こじんまりと山河が景色をつくり、人の暮らしと交わっている場所は、他に見当たらないように思います。

飯能には「東雲亭」だけでなく、いくつかの観光旅館がありました。今、郷土館がある場所には「覧山荘」という国民宿舎があったそうですし、割岩橋の近くには「岩清水」がありました。また、そこから少し下ったところには、割烹料理店として営業を続けておられる「清河園・蜻蛉亭」、それから「雨だれ荘」があります。その一帯は、現在、緑のトラスト四号地に指定されていて、静かな水の流れのなかにサギなどの水鳥がたたずむ風景は昔と変わらないようでもあり、遊覧地として人を集めていた頃の飯能を思い起こさせてくれます。

図書館の近くに「畑屋」というなぎ屋があります。今はうなぎ屋を営んでおられますが、この店は昔、何人もの芸者を抱える飯能でも有数の料亭だったそうです。建物は当時のままのようで、数寄屋風の外観、板塀など、いかにも料亭らしい造りとなっています。そして、この「畑屋」さんのご親族こそが、かの「東雲亭」を切り盛りしていたのだとお伺いしました。

結局、「東雲亭」がどんな場所だったかは、想像するしかありません。でも、調べていくうちに改めて気付かされたのは、飯能の風景はどこにでもありそうなのだけれど、日本人が最もほっとする風景のひとつだということ。「東雲亭」は、そんな飯能の花・鳥・風・月を愛でるための場所だったのでしょうね。

特集

まちなか 高麗横丁

守りながら、変わっていく――それができたら、きっと横丁は復活する。

あちこちに蔵があるのは、昔、町が栄えていた証拠である。

飯能は歩くのに都合のいい町だ。繁華街のある駅周辺からハイキングコースにもなっている天覧山下まで20分ほどで歩けてしまうし、道程には、古い蔵を利用した店舗に洋館風の建物、人の暮らしに通じていそうな細い路地や商店街などがあって、飽きないのである。そのなかにあって、今回紹介させていただく高麗横丁は、もっとも古くから栄えていた通り。今となっては、国道299号線への経路として時折ダンプが行き交う道になっているが、注意深く眺めてみると、所々に昔の面影が残っている。

南北に六町 町のはずれのこの横町は 小商人が軒を連ねていて 人通りは絶えなかった

これは高麗横丁に代々住んでいる小松屋米店のご主人であり、文人でもある、田中順三氏の詩集「高麗横町」（本多企画）の一節である。

もともとこの界隈は、飯能にあって最も古くから栄えていた場所のひとつであった。飯能の地は、秩父や川越、青梅など周辺へ通ずる交通路があった上に、水路の便も良かったことから、自然発生的に人が多く集まっていた。江戸中期には、今の大通り商店街周辺に大きな市が立ち、にぎわいを見せていたという。高麗横丁は、市が立つメインストリートから一本入った横丁ではあるが、秩父方面からのちょうど通り道にあたるという立地条件から、ここに出された店はよく繁盛していたようだ。

冒頭の一節は、昭和の初めの話であるからそれから随分時を経ている。その頃には、飯能に鉄道が敷かれていたことから、街の中心は次第に飯能駅の方へ移りつつあったようであるが、古くから人と人が交わり続けてきた歴史のあるこの横丁は、東京の下町のような味わい深いオーラを放っていたのではないだろうか。

詩集には、さまざまなお店の様子が綴ってある。漆を扱う塗師屋、農具を作る鍛冶屋、子ども相手の駄菓子屋、本通りのような銀行や呉服屋はなかったとある・・・　いわゆる生活に必要なものは何でも揃った庶民的な商店街であったのであろう。

横丁ならではのお祭りもあった。十王堂のお祭りの日にはたくさんの露天が出て、陳列台替わりに家の雨戸を持っていってしまうので、雨戸のほかに表戸がなかった田中家では、露天が店じまいするまで寝られなかったという。何とも、おおらか過ぎる時代の話である。

横丁のご意見番でもある。

いいものは無理をしてでも残したい。

風情のある店構え。

私は知らなかったのだが、高麗横丁のはずれのその向こうに「天覧山駅」があったそうだ。その頃の駅はどのような場所だったのであろう。詩集には駅から天覧山まで丘の下を通るのどかな桜の道があり、遠足の子どもたちや花見客でにぎわったと書かれてある。その時代にトリップしてみたくなる。

大切なものを受け継いでいく。受け継いで、自分のものにして、いまに活かす。

さて、現在の高麗横丁であるが、その頃の様子をとどめている建造物はほとんど残っていない。人の往来は飯能駅周辺に移り、多くの商店は店を閉じてしまっている。それに追い討ちをかけたのが、国道299号線への経路としてダンプが行き交う道となったことであろうか。もともと狭い横丁の空間にあって、大型車両に道を占領されてしまっては、人がゆっくり歩いていられるような場所はない。

こうしたなかで、代々受け継がれてきた建物にこだわり、新しい店舗をオープンさせた人がいる。「江州屋（ごうしゅうや）」の加成庶子（ちかこ）さんである。庶子さんのご主人は、飯能市坂石に工房を構える鍛鉄職人。ドイツでの修行時代にみかけた無人ショップの形態を再現させたいという思いがご主人にあって、ここを活用させてもらうことになったという。

昔、この店は醤油屋さんだったそうである。近江の方から来た庶子さんの曾祖父さまが、「江州屋」の屋号で醤油屋を営んだ。その後にお酒の卸売業を広く商い、昨年廃業した折りに彼女が店をそのまま借り受け、今の店を開いた。横丁は様変わりしたが、ここだけ時が止まっているかのようだ。入口は古い木戸のままであるし、床は土間、壁は土壁風にきれいに珪藻土が重ねられている。現代建築にはない落ち着きのある店内の雰囲気が鍛鉄作品にピッタリで、この場所にふさわしいショップとなっている。

庶子さんは、子どもの頃から慣れ親しんだこの家が大好きだそうだ。これまでに何度かあった改築話の際にも建物の保存を主張したのが彼女であり、今度はご主人の作品を展示する店として使わせてもらえることになった。「江州屋」の屋号をそのままショップ名としたのも、受け継がれてきたものに対する思い入れがあるからであろう。

「この辺りのことで覚えているのは、肉屋さん、魚屋さん、八百屋さん、団子屋さんがあったことかなあ。お昼のおかずはお肉屋さんのコロッケ、おやつはお団子が定番でした。この場所にお店を構えさせてもらったのも、そんな横丁っぽさを復活させたい気持ちが少なからずあるんです」

高麗横丁のことを尋ねると、そんな答えが返ってきた。人通りが多かった頃の横丁は復活するのか、若い世代の手にかかっている。

前述の田中順三氏の長男である純司

さんがそばを打つ「小松屋」も高麗横丁にある。その店構えは、散歩のついでに寄りたくなるような感じで、横丁にぜひ一軒あってほしい佇まいである。この10数年で横丁にあった多くの商店が姿を消したが、そのほとんどの理由は後継者がいなくなったからである。どんな業態であれ自営で飯を食うには厳しい時代であるし、ましてやこの町ではやっていけないというのが、店をたたんだ方たちの判断であろう。大変なことがわかってもいたし、勤めに出る選択肢もあったというが、それでも純司さんはこの場所で新しい商売をやることを決心した。

「物置になっていた米蔵を改造すれば、一風変わったお店になるのではないか」というのが、お店をはじめるきっかけとなったアイデアだった。「貴重な町屋造りの建物を受け継いでいきたい」という思いもあった。

しかし、それだけでうまくいくほど、商売は甘くない。それから幾年かが過ぎ、味を追求してきたおかげで軌道に乗ってきてはいるものの、「勤めに出ていた方が楽だった」というのが本音かもしれない。

一方、いい風向きもある。巾着田の彼岸花が咲く時期は毎年かなりの増客が見込まれるし、飯能市の魅力アップ支援事業の一環で3月初旬に行なわれた「雛飾りお宝展in飯能」でも、思いがけずお客様が増え、そばが売り切れるほどだったそうである。

「工夫次第で人は集まることがわかった。飯能市はエコツーリズム推進モデル地区に選ばれ、にわかに注目を集めている地域でもあるのだから、これから変わっていけるんじゃないかと思っている」

楽観はできないであろう。しかし、純司さんの言葉には確かな手応えを感じている力強さがあった。

そういうもんなんだよ。この一言には、長い歴史が刻み込まれている。

年配者の話も聞くことができた。「あの人の話を聞いておくといい」とみんながお口を揃えたのは、「入口電業」のおやじさんである。ある人は、横丁の主のような人とも言っていた。個性的な飯能弁で、子どもの頃の町の様子を語ってくれた。

昔の子どもは礼節をわきまえていた…。そんな話になって、私が「飯能の人は礼儀とか上下関係にこだわりを感じる」というようなことを言ったら、「こだわっているんじゃない」と怒られた。子どもの頃から目上には従うようにしつけられてきた人間にとって、それはこだわりなどというものではなく、当たり前の空気のようなものである。例えば、それはお囃子の稽古の場面で発揮される。先輩であり、師匠でもある大人に怒られながら言われた通りに覚えた方が手っ取り早いし、そうでもしないとお囃子は覚えられないそうである。

こんな話もしてくれた。通称、かみなり横丁というのがあって、そこにはおっかない親父が幾人もいて、通るたびに雷を落とされたというのだ。昔は、どの町内にも一人はかならずそういう親父がいたそうである。子どもにとっては怖いばかりの存在であったが、町内でもめ事が起きたときには、一国だけど説得力のある声のでかい人がいたおかげでまるく収まったという。話は横道に反れたが、昔からそれでうまくやってきたのだから、(こだわっているのではなくて)「そういうもんなんだよ」ということではないだろうか。

横丁の片隅にあるお地蔵さん。変わらないものの強さがここにもあった。

いまはご自身が雷を落とす役回りとなった。お囃子を指導している子どもたちからは、電気屋の親父ということで“でんじい”と呼ばれ、恐れられているそうである。工場や蔵の跡地に分譲地やアパートができ、高麗横丁のある宮本町周辺にも新住民が増えた。人が変わり、子どもの育て方も変わった。「昔のようにはいかなくなった」と“でんじい”は嘆いておられたが、細々ながらもこの高麗横丁では、飯能人気質が受け継がれているようである。

こちらに引っ越してきた頃、よく天覧山に遊びに行った。その時に必ず通るのが高麗横丁であった。当時はこんな洒落た名前が付いているとは知らず、印象としては、目新しい店もなく古い街並みもない、ただ車で通り過ぎるのみの道路であった。

しかし、よく考えてみれば、飯能でもこんなにいい場所はない。天覧山にも、飯能河原にもすぐに散歩に出られる距離にあるし、商店街にも、図書館にも、一小にも、飯高にも近いわけだから、便利さも享受できる。

取材してわかったのは、ここは歩くべき町であることだ。車で走ればあっという間に通り過ぎてしまうくらい小さな横丁。歩いて訪れた人が、つい立ち寄りたくなるようなお店がたくさんできることを願う。

明治40年の高麗横丁（入口）
下の写真は現在。

高麗横丁の“でんじい”は、飯能の祭りになくてはならない人だ。〈小槻章さん〉

昔の高麗横丁マップ（昭和二十年ころ）
小槻章（入口電業）作

飯能の花柳界

飯能の飲み屋街といえば、南銀座街である。ここにはたくさんの小料理屋やスナックがあり、その数は数十軒にもおよぶ。以前は料亭が多かったという。このあたりには、黒板塀の料亭が何軒も建ち並ぶ花街があったのである。特に多かったのは、飯能の木材業者、繊維業者が隆盛を極めていた頃で、多いときでは50人もの芸者さんがいて、10軒以上の置屋さんがあったそうである。昭和五十年頃までは、夕方になると花籠を抱えた芸者さんをよく見かけたそうだから、それほど時が経っているわけでもない。その後、ほとんどの料亭は姿を消してしまったが、このあたりを歩くとあちこちに古い家が残っていて、往時の面影を感じることができる。

「畑屋横丁」を入ったところの右側に「高島家」という料亭がある。いまも営業しており、三味線の音が聞こえてきそうなたたずまいだ。日本舞踊稽古場の看板が掲げられており、飯能の花柳界の歴史をいまにつなぐお店としてここを取材したいと考えていたのだが、何となく敷居が高くてその前まで行っては断念していた。

再びおもむき写真を撮ろうとしていたら、中で犬が吼え、犬を嗜める人の気配があった。それで、ついに誘惑に負けて門を叩いてしまった。しばらくして中から出てきたのは、普段着姿の和風美人。土日は女将がいないので、平日に電話してほしいと名刺をもらう。お客様は飯能の方もいらっしゃるし、飯能のお客様の紹介で東京の方もいらっしゃるとのことだった。それから、NHK大河ドラマなどの時代劇で所作(立居振舞いのことでしょうか)の指導をしており、このところはずっと忙しいとのことでもあった。

それだけ聞ければ十分であり、改めて取材することもないと思った。料亭のことはわからないが、そこを出発点に芸事を極め、先生になって活躍している人が飯能にいることだけはわかった。